「生き物を物として扱う」とは
――「生命学」へのひとつのアプローチ――

門倉正美

〈論文要旨〉 先端医療技術やバイオ・テクノロジーの進展がわれわれの死生観を揺り動かし、環境問題は別の側面からいのちの危機を突きつけている。また、死の迎え方、老いの生き方、食のあり方といった日常の風景の中でもいのちのありようが問われている。「生命学」は、現代社会におけるいのちのあり方を総体的に捉えようとする試みである。

小論はそうした「生命学」への一つのアプローチとして、デパートの店員に「カブト虫の修理」を頼む子どもの「生き物」感覚の問題を切り口として、都市化や産業社会の論理、さらには一次産業の現場での「生き物」感覚の衰退・希薄化を見ていく。一次産業は「自然条件に依拠して生命を育てる」のを本来の姿としていたが、近代化が推進されていく中で「自然を最大限に効率よく搾取していく」という工業の論理に浸されてきている。

「生き物を物として扱う」近代産業社会の枠組みの中では、家畜や作物をはじめとする人間以外の生き物の生理が侵されるだけでなく、他の生き物のゆたかな生を保証しない殺風景さはやがて人間自身の「生き物」性を損なうことに連なっていくように思える。

「生命学」の抱負

近年、いのちのあり方がさまざまな局面で根本的に問い直されている。例えば、脳死を人の死と認めて、臓器移植を積極的に推進していくか否かは、単に医療現場にのみかかわる問題ではない。脳死を人の死と認めるということは、伝統的な死の定義を揺るがせ、死にゆく人を囲む人たちの死の受容のあり方を変えていくことになる。また、脳死・臓器移植という考え方は、脳が人格ないし生命の最終的な拠点であり、他の臓器は交換可能な資源であるという身体観、ひいては生命

観を含んでいる。他方、体外受精や胎児の遺伝子チェックなどの先端医療技術は、受精から誕生という生命のプロセスへの人為的な関与の可能性を切り開いている。これらの先端医療技術は、「人間が生まれ、死ぬとはどういうことなのか」という根本的な問いを提起しているのである。バイオ・テクノロジーによる遺伝子組み換え実験も、単に人間あるいは産業にとって有用な技術の追及であるだけでなく、生命のあり方を操作するということの意味をわれわれに突きつけてもいる。これらの問題については、一九七〇年代にアメリカを中心として学問的に制度化されたバイオ・エシックス（生命倫理学）が精力的に取り組んできており、アメリカでは、個々のケースに具体的な解決法を提示する役割を担うまでにいたっている。

しかし、いのちをめぐる問題は、こうした先端医療技術やバイオ・テクノロジーといった先端技術の生命への関与にのみ現れるわけではない。例えば、イリイチの言うところの「医療化」の進展で、われわれの生まれ死ぬ場所が自宅から病院に移ってきていることはよく指摘されるところである。[1] それによって、誕生と死という、いのちのあり方にとって最も重大な局面の主催者が本人と家族から、医師・看護婦という医療専門家に移行するとともに、われわれは「死」を病院の密室に閉じ込め、それと直面する機会を遠ざけることになった。そうした社会の感性は、老いを生きることを困難にさせてきている。こうした点も、現代におけるいのちのあり方を根本から問う際に見逃せない局面だろう。

また、生きるということが他の生き物を食べるということで成立する以上、何をどのように食べているのかという点も、いのちのあり方への問いの射程に入ってくる。スーパーでプラスチック・トレイにラッピングされた切り身の肉は、かつて動物であったことを感じさせない。旬を失った野菜や果物にも生き物の香りは希薄なように思える。食のファーストフード化は食の無機的感覚化を促しているようにも思える。そして、そうした食物の生産現場をたどれば、そこにもいのちのあり方をめぐる巨大な問題群がひしめいているようだ。一言でいえば、一次産業の〈工業化〉である。この点の分析が小論の主な課題だが、本論に入る前に、いのちをめぐるもう一つの問題系を見ておかねばならない。

いわゆる環境問題がそれである。地球温暖化問題や南北問題が焦点となった、今年の地球サミットの経緯

がよくあらわしているように、八〇年代後半くらいから、環境問題は国際政治・経済の問題として議論されるようになった。もちろん、環境の危機的状況を克服するためには、国際政治・経済上の方策が必要であろう。しかし、そうした具体的方策の緊急性の名のもとに、環境問題の本質への問いがなおざりにされてはならない。例えば、環境とは何かをとり囲むものとしてイメージされているわけだが、環境問題という時の環境とは何にとっての環境なのだろうか。人間の生存こそが第一義的なものなのだから、環境とはあくまで「人間にとっての環境」を意味するというのが一つの答だろう。しかし、それでよいのだろうか。人間も生き物として他の生き物を食べて生きている以上、他の生き物の生存なしに、人間のみが生き残れるわけではない。環境とは、まず第一に「生き物にとっての環境」なのである。さらに言えば、生態学が明らかにしたように、食物連鎖を根幹とする他の生き物とのネットワークこそが、生き物にとっての環境の土台をなしている。つまり、環境問題とはすぐれて「いのちのあり方」の問題なのである。七〇年代のエコロジー運動は、オイルショックと成長神話の崩壊を契機として、石油文明にひたったライフ・スタイルを問い直すにいたった。エコロジズムのさまざまな発想、問題意識を学問的に論じ直しているのが、七〇年代以降に主に英語圏で盛んな環境倫理学である、と言えよう。加藤尚武氏は環境倫理学の基本主張を、「自然物の生存権、世代間倫理、地球全体主義」の三点に手際よくまとめている[2]が、環境問題の内に同時に「いのちの問題」を読み取る上で、環境倫理学は重要な論点を豊富に提起している。

以上、現代における「いのちの問題」として、先端医療技術やバイオ・テクノロジーが突きつけている問題、生れ死ぬ場所の変化や、老いのあり方、食のあり方というような、日常生活で出会う風景としての「いのちのあり方」、環境問題として現れている「いのちの問題」を大まかに見てきた。これらの問題に関しては、バイオ・エシックスや心身医学、死学、あるいは、エコロジー、環境倫理学などがそれぞれに議論を積みかさねてきている。しかし、それらの学問は上述の問題を、現代社会における「いのちのあり方」の問題として包括的に捉える視座と方法を打ちだすにはいたっていない。そうした中で、森岡正博氏は、上述の生命への問いが現代的な様相で出現したのは、遺伝子操作、環境汚染、脳死などいずれも、生命と現代科学技術の接点においてであることに着目する[3]。現代科学技術を

生み出したのは現代文明であるから、生命を問うことは、必然的に、現代科学と現代文明の問い直しに連結する。この点を踏まえて、森岡氏は、「いのちのあり方」を思想問題・実践問題としてトータルに、かつ具体的にとらえ返す学問を「生命学」として構想し、さまざまなアプローチによる「生命学」の探究の必要性をうったえている。生命学は、「生命にかかわる専門領域の壁を爆破し、生命にかかわるあらゆるテーマをひとつの鍋でゴッタ煮にし」た上で、それらのテーマの「相互関連性を、思想問題として深く掘り下げ」ていく。こうした方法によってはじめて、「現代文明と現代科学のもとで、私たちは生命とどのような関係に置かれているか。そして、私たちは生命とどのようにかかわりあって生きてゆけばよいか、という生命学の問いに、正面から立ち向かうことができるのである」。

現代におけるいのちと環境の危機への感覚を氏と共有する私から見て、森岡氏の提唱する「生命学」の以下のような特徴には共感するところが多い。(1)生命と環境の危機をみすえて、現代科学と現代文明（産業社会）を根本から問い直す視点。(2)専門領域の閉鎖性を突破し、日常生活の感性を重んじることによって、はじめて生命というトータルな現象をとらえうる、とする点。(3)生命を生態系・生命圏という「環境」との関わりの中でとらえていく点。[4] (4)「どのようにかかわりあって生きていけばよいか」というように、理論と実践の乖離を拒否し、実践的関心に裏打ちされた認識を主唱している点。(5)既成の西洋型倫理の人間中心主義に根本から疑義を唱え、人間非中心主義の生命圏原理にたって、人間と生命圏の「共生」を模索している点、[5]などである。

以下、森岡氏の言う「生命学」への四つのアプローチのうちの一つである、「生命に触れるアプローチ」、つまり「日常生活における具体的な生命との付き合い方」の一局面の考察を通じて、「生命学」への私なりのアプローチを試みたい。次いで、そうしたわれわれの「生命との付き合い方」を社会・経済構造として規定している事態についても若干の考察をめぐらしてみよう。

カブト虫の「修理」

まず、内山節氏が論じている、カブト虫をめぐるエピソードからはじめよう。小論全体にかかわる論点がいくつか示唆されているので、少々長いが引用しておきたい。

「最近、今年の夏デパートの昆虫売り場で働いていたという人と知り合いになった。彼の売り場には足のもげたカブト虫などを持った子供たちが訪れてくる。その子供たちは大抵こう言うのだそうである。「カブト虫がこわれちゃったので修理してください」。

「カブト虫は生き物だからね……」彼は仕方なく説明をはじめる。物は修理できても生き物を「修理」することはできない。ところがデパートにカブト虫の「修理」を頼みに来る子供たちは、不思議なほどこのことが理解できない。多分生き物という言葉の意味がわかっていれば、あるいは親が生き物の飼い方を教えていれば、そもそもデパートにカブト虫の「修理」を頼みには来ないのだろうと彼は言っていた。

彼は長い時間をかけて生き物の意味を教えるようにしていた。ところがそのために上司から注意を受けなければならなかった。デパートとしては売り上げに寄与しない仕事をされたのでは人件費の無駄使いである。それから彼の職場には新しい制度ができた。彼の仕事はこんなふうに変わった。

「カブト虫を修理してください」と言って子供たちが来る。彼は「ハイ、わかりました」と言いながらカブト虫を受け取り、カーテンで仕切られた奥の部屋に持って行く。売り場に戻って子供たちに言う。「いま修理していますからね。もう少し待っていて下さい。」しばらくすると彼はまた奥の部屋に行く。そうして、はじめから用意されていた別のカブト虫を持って現われる。「ハイ、直りましたよ」と言って渡す。

もちろん「修理」代はカブト虫一匹の値段と同じである。これならデパートとしてはちゃんと売り上げになっている。足のもげたカブト虫はゴミとして捨てられるとしても、こうして彼は子供たちのために「無料」の説明をする必要はなくなった。

「なんという労働をしていたのだろうね」彼は笑っていた。「こんな話は笑いながらするしかないのだろうね」と言った。

生き物を物として扱うこと、それは自分が生き物であることを投げ捨てることでもあったのである。多分彼は、生き物を物として扱うしかない制度や管理ができ上がっている自分の職場のことを、そうしてこの制度に従うしかない自分の労働のことを言いたかったのだろう。……」[6]

一読して、われわれは、「カブト虫を修理してください」という、子どもたちのあっけらかんとした口ぶりに愕然とさせられる。彼らにとって、カブト虫は修

理可能な「動く玩具」でしかないかのようだ。彼らは、生き物を生き物として感じとる力を決定的に衰退させてしまっているのだろうか。カブト虫の「修理」という、この子どもたちの表現のうそ寒さを、われわれはどうとらえ返したらいいのだろうか。

まず、こんな子どもたちが、本当にかなりの数いるのだろうか。「大抵こう言う」と筆者は言っているが、ごく一部の子どもの感覚を過大に描写しているのではないか、と疑ってみたくなる。そこで、このエッセーについて論じた哲学のクラスの学生たちに、こうした子どもたちの存在の信憑性について、挙手によるアンケートを何回かとってみたりした。概して、三分の一くらいの学生は「信じられない！」という反応だったが、過半数の学生は「さもありなん」と思っているようだった。多数意見に依拠するわけではないが、どうやら例外の強調として安穏としているわけにはいかないようだ。(7)

では、どうしてこの子どもたちは「カブト虫の修理」といった感覚をもつようになったのだろうか。文中の店員氏は、「多分生き物という言葉の意味がわかっていれば、あるいは親が生き物の飼い方を教えていれば、そもそもデパートにカブト虫の「修理」を頼みには来ないだろう」、と言う。本当にそうだろうか。「生き物という言葉の意味」は辞書をひいて理解できるようなものではあるまい。また、「物は修理できても、生き物は修理できない」という店員氏の説明を「不思議なほど理解できない」子どもたちに対して、親たちはどのように生き物の飼い方を教えることができようか。(8) 第一、「生き物という言葉の意味」とか「生き物の飼い方」とかは、親にせよ、だれにせよ、他人から教えてもらうものではないような気がする。さまざまな生き物とのさまざまな出会いがまずあって、そこからひとりでに子どもたち自身が体得していくものなのではないか。

とすると、おそらくは、生き物との出会いが決定的に欠落していることこそが、「カブト虫の修理」という感覚をもたらす第一の要因なのである。早起きして近所のクヌギ林に自分でカブト虫を取りにいった子どもなら、「修理」などというわけがない、と学生たちも言う。そう思って周囲を見回すと、都市が土をアスファルトで覆い、木々や空き地の草々を一掃することによって、子どもに親しかった、カブト虫をはじめとする小さな生命たちを放逐したという平凡な事実が目にうつる。また、農薬や除草剤によって、農村でも有

用な生き物しか生存をおおっぴらには許されていない。つまり、モータリゼーションが代表する都市化の論理はもっぱら人間あるいは産業にとって快適で便利な空間を志向しており、そこには他の生き物への配慮などはみじんも見られないのである。そうした都市化の論理の支配する現代社会に生きる、いまの子どもたちにとって、「さまざまな生き物とのさまざまな出会い」など特権的な事柄なのだ。

次に、どうして子どもたちが足のもげたカブト虫をデパートの昆虫売り場にもってきたかを考えてみる必要がある。おそらくは、それらの子どもたちが、そこでカブト虫を買ったからだろう。われわれは、デパートの売り場の一角でカブト虫が売られるという事態に慣らされてしまっているが、実は、そこにも異様さがひそんでいるのではないだろうか。そこではカブト虫は野性の生を奪われているだけでなく、「玩具」に類する商品、つまり「物」として売買されているのである。そして、デパート側は、子どもたちによる「カブト虫の修理」という異様な要求になにげない顔で応じることを店員に命じている。それも、カブト虫という商品の在庫回転率を高め、利潤をあげるためなのである。

こう考えてみると、むしろ本当にショッキングなのは、「カブト虫の修理」を頼みにくる子どもたちのナイーブな無感覚さよりも、カブト虫を「修理する」と称して使い捨てていく、デパートの昆虫売り場のあり方の方ではないだろうか。内山氏は、知人の苦い笑いのふりむけられている先を、「生き物を物として扱うしかない制度や管理ができ上がっている自分の職場、そうしてこの制度に従うしかない自分の労働」に見ている。われわれは、子どもたちの奇矯な感覚に対して、他人事として眉をひそめてはいられないのだ。「修理」を頼みにくる方も、「修理」してやる方も、「生き物を物として」扱っている点では同断なのである。いや、むしろ「生き物を物として扱うしかない制度や管理」こそが、カブト虫を「修理」しにくる子どもたちの「生き物」への感性を衰退させている、と言うべきなのだろう。カブト虫を「修理」するという感覚は、「生き物を物として扱う」われわれの社会・経済構造自体がもつ、生き物性への無頓着さを、デフォルメして表現しているにすぎないのではないか。

生き物を物として扱う制度

では、「生き物を物として扱うしかない制度や管理」

は、現代社会のどのようなところにあらわれていると見ることができるのだろうか。カブト虫の例が表しているように、「生き物を物とさせて」しまう力は、「売上げ」の向上を迫るデパート資本の要請である。生き物が「商品」として、利潤追求の手段となっている点に、「生き物を物として扱う」ことの本質がある。この内山氏の指摘は、K・ポランニーが市場経済の特徴を、本来商品ではない三つの本源的生産要素を商品化したところに見ていた[9]ことを思いおこさせる。ポランニーによれば、市場経済は、三つの本源的生産要素である「労働、土地、貨幣」を市場メカニズムに組み込むことによって、市場システムの自己調整作用を完遂する。市場での販売のために生産されるものが商品である以上、人間活動の別名である「労働」が商品でないことは明らかだろう。また、「貨幣」は購買力の象徴にほかならないから、本来、それらは決して生産されるものではない。そして、「土地とは自然の別名にほかならず、人間はそれを生産することはできない」。カブト虫売り場では、「労働」という人間活動を売り渡した店員が、その「労働」を買ったデパート資本によって、カブト虫という「自然」を効率良く売ることを強制されているわけである。

「土地は自然の別名にほかならない」というポランニーの指摘の含蓄は深い。ルソーは土地を柵で囲うことに私有財産の起源を見たが、マルクスが着目したように、実際に、イギリス資本制は羊放牧のための土地「囲い込み」から始動したのである。また、土地を私有することなど思いもよらないアメリカ原住民の目の前で、ヨーロッパ人たちが広大な土地を柵で囲うことによって貪欲に私有していったというのが、西部開拓史の真相だった。ところが、土地とは、その開拓民の子孫のアルド・レオポルドが「土地倫理 Land ethic」という表現で自らの環境倫理を特徴づけたように[10]、あらゆる生命を育む「生態系」そのものである。土は植物の根を支え、水と養分を供給し、微生物やさまざまな小生命体の生きる場であり、動植物が死んで帰る所である。土がなければ、植物・動物・微生物の間の根源的な食物連鎖はなりたちえない。「自然の別名である」土地の商品化は、土地が育む生命体の商品化の土台をなしているのではないだろうか。

そうした観点で見ると、デパート売り場という第三次産業で隠微な形で行われている生き物の物化は、生き物を通じて生産活動を行っている、農業、畜産業、林業などの一次産業において、より大規模に、かつ深

刻な形態で進行しているように思えてくる。一次産業が「一次」であるゆえんは、土地を代表とする自然から直接に、食料などの人間生活にとっての基本物資を収穫することにある。一次産業は、本来は自然条件の中で生き物を育てる産業であり、一次産業における生き物との接し方がわれわれの社会総体の生き物に対する感性の基底を形成しているように思える。ところが、冒頭に示唆したように、消費者が食のあり方として間接的な形で接する、現代の一次産業の生き物への処し方は、生き物をもっぱら商品としてしか扱っていないように思えてならない。

アニマル・ファクトリー

「生き物を物として扱う」という、内山氏の表現に接したとき、私が第一に思いうかべたのは、人工的に光を調節された空間の中の狭いケージに、ひしめくように閉じ込められ、エサをついばむ他は満足にからだを動かすこともできないような生活を強いられているブロイラーの姿だった。主導的な「動物解放論」者であるP・シンガーと、J・メイソンによるアメリカの畜産の現状の告発レポート[11]から、現代の畜産における「生き物の物化」の実情の一端を見ておこう。同レポートの訳者の高松氏によれば、日本の畜産における家畜の飼われ方も六〇年代以降、アメリカ型畜産とほぼ同様の様相を呈しているとのことである。

ブロイラーは、ヒヨコのときにくちばしと足のつま先が切り落とされる。新聞紙一面ほどの広さに五羽がつめこまれるケージでの監禁・密飼いのストレスの中で互いにつつきあい、傷つけあう際のダメージを致命的にさせないためである。また、密飼い下での病気の蔓延をあらかじめ防止するため、いろいろな病気の予防注射や抗生物質投与が行われる。鶏舎は、最初の一、二週間は成長を早めるために、ほとんど一日中明るくされているのに対し、市場体重に達する前の一、二週間(つまり第六、七週)は逆に薄暗くするか、まっ暗闇にされる。過密下での精神状態を安定させて、「商品」が傷ものになるのを防ぐためである。ニワトリの寿命が一五年から二〇年であるのに対して、ブロイラーは手頃な体重にまで肥育した八週間で屠殺される。

採卵鶏の運命もブロイラーよりしあわせというわけではない。まず、ヒヨコの雌雄を判別し、雄のヒヨコはビニール袋で窒息死させられる。そして、くちばしと爪先の切り落とし。予防注射ぜめと、監禁・密飼いの闇の中での成熟。本来は土を踏むはずの鶏の足をひ

どく傷めるケージは、卵が転がり落ちるように傾斜がつけてあり、安定が悪い。先が切られてしまったためにすらついばみ、水を飲み、規則的に産卵する。ほぼ一年半ほどで、採卵能力が減退し、餌のコストとひきあわなくなり、スープや加工食品用に処分される。ここでは、鶏は、飼料と水という原料から卵という製品をうみだす「産卵マシーン」にすぎないかのようだ。[12]

ブタとウシを物扱いする飼育形態について同様の記述を反復するまでもないだろう。共通しているのは、自動的に温度・湿度・照明・換気が調節され、自動給餌・給水・糞尿処理される人工的な空間の中での監禁・密飼いである。牧場でノンビリ草を食むイメージの強いウシですら、フィードロットという狭い空間の中に多くの期間閉じ込められて、ひたすら餌を食む生活を強いられる。ブタ、ウシの生理の極限まで栄養濃厚な餌をつめこまれ、商品化を早められているのである。そこに見られるのは、「生き物を育てる」という一次産業の生き物との付き合い方ではなく、「自然を最大限の効率で搾取する」という二次産業、工業の論理である。土や大気という自然条件から切り離された人工的な飼育空間はたしかに「ファクトリー(工場)」であり、利潤最大化のために生き物としての生理の極限まで追い詰められている家畜たちは、一九六四年にイギリスのルース・ハリソンが先駆的に告発したように、「アニマル・マシーン」[13]とされてしまっている。

日本の農村風景を振り返ってみると、高度成長の時代に農村の情景から失われていった生き物たちは、農薬や化学肥料によって絶滅させられた虫たちや小動物たちだけではないことに気づく。ウシ、ウマ、ブタ、ニワトリなどの家畜類も田畑、あぜ道や農家の庭先からみごとに消えていった。農業機械の大量導入は牛馬の力を不用とさせ、化学肥料の多投は堆肥作りの煩わしさをなくした。モータリゼーションによって都市型の消費形態が一挙に農村に侵入したこともあるだろう。一般の農家にとって家畜の存在は不潔で手間のかかるものでしかなくなってしまった。五〇年代には有畜農業の推進が真剣に考慮されていた時期もあったにもかかわらず、六〇年代は一般農家からみごとなまでに家畜を一掃した。[14]その一方で、われわれの食生活における肉と鶏卵の消費量は、一九六八年と八〇年とを比べてみると、それぞれ四・三倍、二・三倍と飛躍的に増大している。[15]ブタやニワトリは、農家の庭先で小規模に飼育されるのではなく、畜産専門家によって、

上記のようなアメリカ型「工業的畜産」を採り入れた養豚場や養鶏場で大規模に飼育されるようになったのである。

農業の工業化

畜産における「動物工場」に対応する農業の形態は、「植物工場」と呼ばれる、野菜・果物の水耕栽培だろう。[16] そこでは、温度・湿度・照明などの空間的条件のみでなく、水溶液の養分をもたえずコンピュータによって自動制御することによって、野菜・果物の生き物性への管理は極点にまで達している。土はもはや植物の単なる支えとしかみなされておらず、不潔なうえに、生産性に不確定要素をもちこむものとして拒斥されている。しかし、土ひいては自然を嫌う水耕栽培のこうした工業性が、人工的環境をつくり出すためのエネルギー多消費に加えて、無菌管理を強いていることを指摘しておかねばならないだろう。

さて、「農業の工業化」は何もコンピュータ制御の水耕栽培に限ったことではない。高度成長以降の農業全般のあり方が「工業化」している、と見ることもできるのである。高度成長の期間に、「農業の工業化」が雪崩のように一挙に進展した、とよく言われる。「工業化」の現象的指標は、農業の「機械化・化学化・装置化」[17]である。「工業化」が推進されたのは、工業製品や工業的な生産体制をとりいれることによって、農業生産が合理化・効率化されると考えられていたためである。高度成長期の農業機械化ブームは、農業機械導入の激増ぶりから明らかだろう。例えば、一九六〇年から七三年の一三年間で動力耕耘機は五一万四、〇〇〇台から三三一万二、〇〇〇台へ、トラクターは一、三四五台から二九万一、〇〇〇台へと急増している。また、耕耘―田植―収穫―脱穀の過程すべてが機械化されていった事実も見逃せない。この時期に、農業化学化の中心をなす農薬の種類・使用量も激増した。それと歩調をあわすように、畜産での配合飼料への食品添加物の使用も急増している。高度成長期の化学肥料の使用の増加ぶりもめざましい。六一～七三年で、チッソ肥料が一四%、リン酸肥料が五二%、カリ肥料が二一%それぞれ増加している。[18] 同じ時期に、機械化と化学化をくみあわせた施設園芸も急速に成長している。六五～七五年に、ガラス室が六・四倍、ビニールハウスが二〇倍にも増えている。こうした施設園芸が石油エネルギーへの依存とともに、農薬の多用を不可欠とする農業である点も、農業の工業化が種々の要素を一

体とする一つの大きな流れであることをうかがわせるだろう。

六〇年代の農村を席巻した、こうした「機械化・化学化・装置化」の嵐は、農業のあり方を根本から大きく変えた、と言えるだろう。たしかに、田畑を耕作することは自然環境を改変することだし、品種改良などによって長い年月をかけて自然の植物・動物を作物化、家畜化することも自然への積極的働きかけと見ることができる。これらの点で、農業は、採集・狩猟経済と比べれば、はるかに「自然を人間にとって有用な環境に改変する」という工業の性質に近い。[19] 実際に、過去の文明は、農業によって沃地を砂漠化させるといった、「工業的」規模の環境破壊をひきおこしてきてもいる。しかし、「自然環境に働きかけて、人間にとって有用な物を生産する」という点で、工業と通じるところがあるにしても、農業は工業とは本質的に違う。「自然に対する働きかけ方」が根本的に違うのである。

ここで、これまで一次産業は「生き物を育てる」のに対して、二次産業は「自然を最大限の効率で搾取する」と大まかにのみ捉えていた両者の相違点を敷衍しておこう。農業は、作物や家畜という生き物を対象とし、農業における「生産」とはそれらの生き物を「育てる」ことであって、それらの生き物を加工したり、つくり出したりすることではない。それに対して、工業は、原則として無生物を対象とし、原料を加工することによって有用物をつくり出す。農業の営みが土を場とし、水や天候、昼夜、季節などの自然条件に依拠するのに対して、工業生産は工場という人工的な空間において、昼夜・季節の別のない人工的な時間の中で作業するのであって、自然条件に左右されることはない。農業にとっての根源的な資源が生き物と水土であるのに対して、工業にとっての根源的な資源は化石燃料や鉱物資源である。農産物が有機物の性質上、自然の循環過程に戻りうるのに対して、工業生産物はプラスチック類やＰＣＢ、放射性廃棄物が端的に表しているように、自然の循環過程に戻りえないものが大半である。また、農作業が自然条件にあわせたペースで生産の全体的過程に携わるのに対して、工業労働は、利潤追及を至上とするペースで分業化されている。農業が本来は自分たちが食べるための生業（なりわい）であるのに対して、工業は他人に製品を売って儲けるための事業である。農業が本来小規模であるのに対して、工業はいくらでも大規模化できる。農業が本来は多様な作物・家畜とかかわるのに対して、工業は単一種類

の規格化された製品を扱う。[20]

これらの相違点の内、「生き物を物として扱う」という産業社会の趨勢との関連で重要なのは、農業が「自分たちが食べるために、生き物を育てる」という本来のあり方から大幅にずれてきてしまっている点である。先に述べた「機械化・化学化・装置化」という現象面での「工業化」は、生き物との関わりという根本的な点でも農業の「工業化」を促している。その先端的な現れは、先に述べた「植物工場」であるが、ハウス農業もほぼ同様の側面をもっている、と言えよう。トマトのハウス栽培では、温度・湿度・明度などが人工的に調節されるハウスという人工的空間の中で、農薬や化学肥料の大量投入によって、トマトが促成栽培され、自然条件に依拠しない人工的空間によって、旬とは無関係に野菜や果物が「つくり出さ」れているのである。

また、バイオ・テクノロジーの進展による品種改良技術の精緻化にも目を向ける必要があろう。一代限りのＦ１（一代雑種）改良ではあるが、「まっすぐで大きなきゅうり」といったような、市場の瑣末な要求を満たすような品種改良がさかんに行われている。作物や家畜自体が新石器時代以来の人類のたえざる品種改良の産物なのだが、バイオ・テクノロジーによる生命体の生理の改変は、そうした長期的な文化的過程とは異質の恣意性を含んでいるように思える。前者が自然条件に依存する形で行われてきたことと対比すれば、後者は実験室という人工的条件の中で行われるのであり、いわば自然への農業的関与と工業的関与の相違と似た違いがあるように思えるのだ。

さて、「植物工場」にきわまる「土離れ」に話を戻せば、そうした傾向は農業一般にも見受けられる。田畑の土は、化学肥料と農薬によっていためつけられ、土中のミミズなどの小動物は死に絶えている。田畑は商品作物を効率よく生産する場としかみなされなくなった。耕土や作物が他のさまざまな生き物たちとネットワークを結んで生態系をなしている、という「農」の知恵はもはや薄れてしまっている。「土」という生命体ネットワークの根拠地を重んじない農業の姿勢は、作物を単なる商品とみなしており、「生き物を物として扱う」産業社会の大勢に与しているのである。

「一次産業の工業化」の締めくくりとして、林業と水産業についても簡単に言及しておこう。先のカブト虫のエピソードを紹介した本の中で、内山氏は、林業

の問題点にもふれている。氏は、渓流釣りで通いつめたのをきっかけに山村の暮らしや労働のあり方にふれ、山里の人々の山や森との多様な関わりを生き生きと描いている。[21] 山村は賃金労働の現場と並んで、内山氏の思想にとっての重要なフィールドなのである。高度成長の波を受ける前の山村の人々は、山から実に多様な恵みを得ていた。単に木を切り出すだけでなく、薪を拾い、炭を焼き、獣を追い、木の実や山菜や茸を求めて山に入った。焼き畑を作ることもあった。そうした中では、村の人々は、長い間の経験によって培われてきた知恵にもとづいて、山の木々や動物たちと付き合ってきた。しかし、高度成長の波に洗われ、山村でも貨幣の価値が、つまり利潤の効率的追求の精神が支配するようになる。現在の植林や伐採では、樹木の木材としての価値だけが最優先されている。山の木々は山の地滑りを防ぎ、川を洪水から守り、山に住む他の植物や動物を養っている。木は単独ではえているのではなく、あくまで山の生態系の一員として生活しているのだが、木材としての商品価値だけを貴ぶ眼には、そうした面は視野にはいらない。現代の林業では、樹木は生き物としてではなく、もっぱら木材という商品つまり「物」として扱われているのである。

水産業の現状はどうだろう。沿岸漁業を見限って、石油と強力な動力やハイテクの威力で遠洋の大規模漁業にでかけていく漁民たち、あるいは、原発などの立地の際に、先祖伝来の海との付き合いを「漁業権」という形で売っていく漁民たちの心性には、石牟礼道子が報告する、かつての水俣漁民のように魚たちと交感する感覚はもはや残っていないのではないか。「彼女（ゆき）は海に対する自在な本能のように、魚の寄る瀬をよくこころえていた。そこに茂平を導くと櫓をおさめ、深い藻のしげみをのぞき入って、「ほーい、ほい、きょうもまた来たぞい」と魚を呼ぶのである。しんからの漁師をいうものはよくそんなふうにいうものであったが、天草女の彼女のいいぶりにはひとしお、ほがらかな情がこもっていた」。[22]

「生き物であることを投げ捨てる」

さて、これまで畜産、農業、林業、水産業という順で、日本の現代の一次産業が「生き物を育てる」という、一次産業本来のあり方からはずれて、自らの対象である生き物をもっぱら「商品」としてのみ見ていくという「工業的」な姿勢に席巻されているようすを概観してきた。内山氏がデパートのカブト虫売り場の「売

上げ第一主義」の内に、生き物を「物化」してやまない現代社会の趨勢を見ていたように、「生き物を物として扱う制度」は、もちろん一次産業特有の事柄ではないし、一次産業の現場に責任を転嫁してすませられることでもない。高度成長が都市から農村、そして山村へと若干のタイム・ラグをともないながら波及していったことがあらわしているように、責任といえば、むしろ都市産業の資本力の方にあることは歴然としている。ただ、都市に住む人々がともすれば忘れがちだった、自らも生き物として他の生き物とかかわるという、生き物との関わりの原点が一次産業の生業の現場によって担われてきていたにもかかわらず、現代においては、そうした原点そのものが揺らいでいるということを示しておきたかったのである。

内山氏のカブト虫の文章で、「生き物を物として扱う」という点とともに、もう一つひっかかるのは「生き物を物として扱うこと」は、「自分が生き物であることを投げ捨てることである」と言い切っている点である。「天につばする」ように、他の生き物を「物化」するまなざしが結局人間自身にはねかえってくる、というのである。一次産業の工業化現象の中で、農薬・化学肥料漬けの作物や、抗生物質とストレスまみれの畜肉を食べることによって、生き物の物的扱いが因果応報的にわれわれの身体をむしばんでいくという事態も、「自らが生き物であることを投げ捨てる」ことにつながっているかもしれない。生き物の生理が無視された食物のあり方や、臓器移植的発想の進展、さらにはバーチャル・リアリティのような経験の擬似化の内に、人間の身体のアンドロイド化を読みとる論者もいる。

あるいは、ヘーゲルの言う「主人と奴隷」の弁証法のように、主人づらして他者を奴隷としてこきつかっているうちに、他者の労働に頼らなければ生きていけない「隷属状態」になる、という疎外論的な反映が含意されているのかもしれない。つまり、他の生き物を物として扱うということは、自らをとりまく環境から生き物の匂いをとりさってしまうことになり、そうした「物化」した環境の中で、ひとり人間だけが生き物性を保持することはできない、ということになろう。実際、内山氏は『自然と労働』の中で、人間の活動の所産は当の活動の本性を表出している、というヘーゲルの外化論の発想をうけて、「風景」あるいは「景色」という視座をうちだしている。人間たちは生活をいとなむ過程で、ある景色をつくりだしていく。青々と稲

の繁る農村の景色が農民の労働と結びついているように、商都には商人の労働と結びついた景色、工場地帯には工場労働と結びついた景色が生まれてくる。景色は、そこで暮らす人々の仕事や生活や文化の姿を象徴的に表現する、と氏は言う。[23] とするなら、高度成長の時代が熟練労働を解体し、労働者の協同をずたずたにすることにより、感性ゆたかな、氏の知人に「工場の風景は、人間が生きていく最低限の風景を超えてしまった」[24]と言わせたように、「生き物を物として扱う」時代は、人間すらも生き物として生きにくい荒涼とした「景色」をあちこちに作りだしていったのだろう。

氏は、現代を、老いを強いられる時代、生きることの憧れを失っている時代、死の世界を避けている時代、異次元を失っている時代、原則を問わない時代というようにとらえ、さまざまな角度から、そこでの生の空疎さを象徴する景色をスケッチしている。[25] 中でも、「生き物を物として扱う」産業社会の趨勢に無感覚になってしまったわれわれに、他の生き物との「共生」が現在的課題であることをストレートにうったえている、次の一節は印象深い。

「動物たちの棲めなくなった山はもう山ではないのであろう。魚たちの棲めなくなった川も、やはりもう川ではないのであろう。……動物たちが追いつめられていく時代には、人の社会もどこかで追いつめられているに違いない。……土や動物たちと感覚的に切れた世界で暮らしていくとき、人間は自由でありうるか、これは現代の哲学の課題である。」[26]

私も、この「現代の哲学の課題」を引きうけていこうと思う。

〈注〉

(1) イリイチの「医療化」概念については、イヴァン・イリイチ『脱病院化社会』（晶文社、一九七九年）参照。『高度成長と日本人 Part 1』（日本エディタースクール出版部、一九八五年）、三頁、三二五頁の表によると、例えば、一九四七年には病院等での施設内分娩がわずか二・四％、自宅その他での分娩が九七・六％であるのに対して、一九七〇年にはそれぞれ九六・一％、三・九％とみごとに逆転している。死亡についても、同じ時期についてそれぞれ九・二％、九〇・三％から、三七・五％、六二・五％というように、高度成長の時代が「病院化」の時代でもあったことが読み取れる。

(2) 加藤尚武『環境倫理学のすすめ』丸善ライブラリー、一九九一年、第一章。

(3) 森岡正博『生命学への招待――バイオエシックスを超えて――』勁草書房、一九八八年、序章参照。

(4) この点は、森岡氏が上掲書の中で、英米のバイオ・エシックスの「パースン」論に対して、「他者」という原理を対置している点にも通じているように思える。個体を孤立させてとらえるのではなく、関係性の中で見ていく視点であり、氏の「他者」論は豊かな含蓄をもっている。

(5) 「人間中心主義」をどう捉えなおしていくかは、人間と環境とのかかわりを主題とする環境倫理学の主要テーマの一つだが、森岡氏のように、「人間中心主義か、非中心主義か」という二項対立図式ですべてを裁断してしまうのは、環境問題のさまざまな局面で、時に不毛な対立を外挿することになるのではないか。例えば、山村の人々が生活圏である山の手入れをするのは、子孫のためという人間中心主義なのか、山そのもののためという人間非中心主義なのか、一概にわりきることはできまい。

(6) 内山節『自然と労働』、農文協、一九八六年、一五―一六頁。

(7) 「カブト虫の修理」と似たような子どもたちの「生命知らず」現象としては、ジャーナリズムの報じるところによれば、「刺身が海を泳いでいるのかと思っている子ども」、「生きているエビもスーパーで売っているエビのように頭がないと思っている子ども」、「ニワトリは四本足であると思いこんでいる子ども」、「お肉はどんな木になるのと問う子ども」などを思い起こす。

(8) この点は、アメリカから始まり、近年ようやく日本でもとりあげられるようになった「環境教育」の必要性と困難さに通じるところがあるようだ。環境や自然の大切さを、とってつけたように教えこむことはできない。たぶん、「教育」の押しつけがましさをいかに脱却するかが、日本の都会で「環境」をどう見つけだすかという点とともに、課題となるだろう。

(9) カール・ポラニー『大転換――市場社会の形成と崩壊』東洋経済新報社、一九七五年、九六―九八頁。

(10) アルド・レオポルド『野性のうたが聞こえる』森林出版、一九八八年。一九四四年に出版された原書 *A Sand County Almanac* は、環境倫理学の古典としての評価が高い。

(11) ジム・メイソン、ピーター・シンガー著『アニマル・ファクトリー』(現代書館、一九八二年)。ピーター・シンガーの『動物の解放』(戸田清訳、技術と人間社、一九八八年、原書 *Animal Liberation*, 1975) は動物解放論の古典である。動物解放論が、それまでの動物愛護運動と違うのは、「種

主義Speciesism」という形で人間中心主義を撃つ哲学的主張に裏付けられている点、南北問題に連なる社会的・経済的含蓄をもっている点に加えて、工場的畜産と動物実験という日常的・産業的動物虐待の現実を克明に追跡・批判している点だろう。

(12) アメリカの畜産経営誌は、あからさまにこう述べている。「今日の採卵鶏は、つまるところ、原料としての飼料を完成品としての卵へと効率よく変えるための、たんなる変換装置にすぎない」(『ファーマー・アンド・ストックブリーダー』一九六二年一月三〇日号、メイソン、シンガー上掲書一九頁の引用による)。

(13) ルース・ハリソン『アニマル・マシーン』講談社、一九七九年。なお、ハリソンの告発は、ヨーロッパ諸国でセンセーションをまきおこし、ウィンドレス畜産やケージ養鶏の全面的禁止、あるいはケージ面積の法律による規制等の「動物福祉」的方策がとられるようになった。しかし、日本では、味や薬害への危惧の念から、放し飼いの鶏肉や鶏卵を求める動きは見うけられるが、「動物の権利・福祉」という観点から、近代的畜産による家畜の「物化」に歯止めをかけるような動きはまだきわめて弱いものでしかないようである。注11で紹介した『動物の解放』の訳者あとがきで、戸田氏がアニマル・ライト(動物の権利)にとりくむ日本の団体について紹介している。

(14) 守田志郎は、ヨーロッパで有畜農業が農業の基本として健在であることを、感慨をもって報告している(『農業は農業である』農文協、一九七一年、第四章)。

(15) 上掲『アニマル・ファクトリー』の訳者、高松修氏の解題参照。

(16) 高辻正基『植物工場』、講談社ブルーバックス、一九七九年。

(17) 坂本慶一「生存のための農業」(玉野井、坂本、中村編『いのちと〝農〟の論理』学陽書房、一九八四年所収、四〇―四二頁)。農業の「機械化・化学化・装置化」を示す、以下のデータも同論文から借用した。

(18) 機械化の数字の爆発的な増加ぶりからすれば、化学肥料使用の増加の割合はそれほどではないようにみえる。しかし、日本の農業がそれ以前から多肥投入型であった(上掲守田志郎『農業は農業である』、第八章参照)ことを考慮しなければならない。

(19) もっとも、「農業は工業にはなりえない」と主張する守田志郎は工業による自然改変は、農業の自然改変のようなまやさしいものではなく、「自然からの奪取」というべきだ、と述べている。「工業は自然の中から堀り取り、えぐり出し、はぎとり、吸い取り、ハッパでふっとばし、自

然をぶちこわしながらの採取である」（守田志郎、上掲書、一三〇―三二頁）。

(20) 現代におけるいのちのあり方や環境問題を考えていく上で、「工業化」していない農業の本来のあり方（「農」と言うべきか）と工業の相違点が意味するものを考察していくのは、重要な出発点になると思う。農業と工業の違いについては、学生時代に友人と議論して、「生産という点では同じではないか」と言いまかされて以来、ひっかかっていたが、今回、室田武『水土の経済学』（紀伊国屋書店、一九八二年）、守田志郎『農業は農業である』（農文協、一九八八年、初版一九七一年）、槌田劭『破滅にいたる工業的くらし』、『未来につなぐ農的くらし』（両書とも樹心社、一九八三年）、山下惣一『土と日本人』（日本放送出版協会、一九八六年）、谷口吉光「農業は産業か、なりわいか論争」（別冊宝島一四五『農業大論争』所収）、宇沢弘文「効率性基準をこえて新しい農村政策の確立を」（『現代農業』一九九一年一月臨時増刊号）等から学ぶところが多かった。

(21) 内山節上掲書、および同氏の『山里の釣りから』、『山里紀行』（両書とも日本経済評論社刊）参照。一九九〇年刊の『山里紀行』では、七〇年代には高度成長の価値観にひたされてしまったかにみえた山里の人々が八〇年代に入って、山里の暮らしの独自の価値を再認識しはじめるようすが描かれ、読者に希望を与える。

(22) 石牟礼道子『苦海浄土』講談社文庫

(23) 内山節『自然と労働』、農文協、一九八六年、五〇頁。

(24) 同書、六二頁。

(25) 順に、同書の「老岩魚」、「ヤドカリ」、「墓」、「空虚」、「原則」の節で描かれている。

(26) 同書、六六―六七頁。